

# コトワザあらかると



2018年11月1日

日本ことわざ文化学会

# コトワザあらかると

## 目 次

目 次	(02)
<b>第1部 ことわざエッセイ</b>	
第1章 富士山のようにになりたい	穴田 義孝 (04)
第2章 「好・信・楽」を伝えたい ー松坂城の一期一会ー	蟻川 剛 (08)
第3章 動物のことわざ、そして犬のことわざ色々あちこち	時田 昌瑞 (11)
第4章 当たるも八卦当たらぬも八卦	藤村 美織 (15)
第5章 虎穴に入るか入らぬか ー侍ジャパンのワールドカップ・ロシア大会の断章ー	山口 政信 (19)
<b>第2部 ことわざコラム</b>	
第1章 少し愛して、なが〜く愛して	石原 仁誌 (24)
第2章 心に残ることわざ	熊本 恵丹 (25)
第3章 ‘スマホ’と‘虫’と‘ことわざ’と	小森 英明 (26)
第4章 「留学生と牛丼屋」	佐古 恵里香 (27)
第5章 一度あることは二度ある ーマラソン挑戦記ー	清水 泰生 (28)
第6章 人が人を裁くな by 天之御中主	中尾 暢見 (29)
第7章 家族の干支	中村 富美 (30)
第8章 「犬が西向きゃ」	三木 恒治 (31)
執筆者紹介	(32)
編集後記	(34)

# 第1部 ことわざエッセイ

## 第1章 富士山のようにになりたい

穴田 義孝

### はじめに

私は東京生まれ、妻は北海道生まれですが共に富士山が大好きです。温泉に行くことが共通の趣味ですが、10年来の研究課題である「郷土（暮らしの中）のことわざ蒐集調査」の過程ではほぼ全国制覇したこともあり最近はおまかせ富士山が見えるところ、特に静岡側の各地に行っています。三島のスカイウォーク（吊り橋の上から晴れていれば富士の絶景が見える）には開通の初日に行ったりしたものです。

ところで、「富士山が大好き」は私どもだけではないことも事実です。例えば、日本全国には「何々富士」と呼ばれる「郷土富士」とか「ご当地富士」という山々が数多く存在します。北海道の蝦夷富士（羊蹄山）、青森の津軽富士（岩木山）、岩手の岩手富士・南部片富士（岩手山）、秋田、山形の出羽富士（鳥海山）、福島の会津富士（磐梯山）、東京八丈島の八丈富士（西山）、滋賀の近江富士（三上山）、鳥取県の伯耆富士（大山）、香川県側では讃岐富士・愛媛や高知側では伊予富士（飯野山）、大分県の豊後富士（由布岳）、さらに鹿児島島の薩摩富士（開聞岳）などと全国各地で親しみを込めて呼ばれています。富士山は何故これほど多くの人に愛されるのでしょうか。ことわざ社会心理学の視点から少し考えてみたいと思います。

### ♪富士は日本一の山―「あたまを雲の上に出し、四方の山を見下ろして…」―

富士山は標高3776.24メートル、日本一の高さを誇るほぼシンメトリー（左右相称）の独立峰です。その姿は季節や見る角度や位置によって千変万化で、春のたなびく雲を伴う姿、様々な角度から桜や松、湖や海、周囲の山々、森林や茶畑、寺社や古民家などの古い建物から近代建築に至る森羅万象に調和する姿、さらに冬の雪景色、ご来光に夕日、夕やけ、月も星も雲さえもすべてを包み込む裾野の広い安定した外見的美しさがあります。そこで本家富士山は日本人のみならず諸外国の人々にも「美しい」と思われ、日本の象徴とさえ言われています。そこであこがれにも似た思いが全国で共有されて「郷土富士」が全国にあると言えましょう。

ちなみに、著名な既成の（伝承・古典的）ことわざでは初夢に見たい縁起の良い夢としての「一富士二鷹三茄子」が思い浮かびます。富士は「富（金）」、あるいは「無事」の意味であり、鷹は「貴・高（地位・名誉）」、茄子は「成す（子宝）」を指すという説があります。語呂合わせですが、富士山は縁起の良いものの筆頭になっています。

「富士の山ほど願うて、蟻塚ほど叶う」「富士の山ほど願うて、すり鉢ほど叶う」という類句があります。この富士山は「大きな（望み）」の比喻であると思われます。また、「富士の山と丈比（タケクラ）べ」や「富士の山を蟻がせせる」は富士山が凄すぎて他は比較にならないという意味です。「富士の山を張り抜く」は富士山と同じ大きさの張り子の型を作るのは不可能という意味でこれも富士の凄さを強調しています。これらに対して「富士は磯」の句は反句ともとらえられます。富士山でさえ相対的にある物事に比べれば磯と同じ様にたいしたことがないものとします。しかし、結局双方を統合すれば富士山はカリスマ的な存在としての象徴とされていると言えましょう。

### ♪富士山と第一印象

「富士山は美しい」とは様々な人々のあらゆる角度や経験などから徐々に印象形成されてきたと考えがちですが、実は第一印象と係わりがあるのではないのでしょうか。第一印象とは人間の場合服装や表情、姿勢などの見た目や声などがその指標となり、対象に対するその後の評価の決定的なく構え>となるとされます。日常語でいう「思い込み・決めつけ・固定観念・先入観」であり、必ずしも好ましい心的状態とは言えません。

富士山に対しては実際に見ても写真や絵画などで見ても、誰もがその第一印象として快、好意という感情・情緒を根底に「美しい」という理念的価値観が強烈に形成されるのではないのでしょうか。それほどの外見、見た目と言えます。そしてその後の思い、あるいは認識を固定化させ、持続するというのが実態なのではないのでしょうか。これは例えば後に山頂まで登山して、草木のないゴロゴロした殺風景な登山道の岩肌を見ても断固変わらないく構え>となっていくようです。

第一印象でその後の認識は80パーセント決まってしまうという説があります。パーセントの数値はともかく、第一印象は視覚による見た目が大部分であるとは実証されているようです。また、富士山に関しては実感さえできると言えます。しかしそうであっても、外見からの第一印象を脱して、その後の<相互作用・対人関係・社会関係・コミュニケーション>などによって外見から内面の価値観に変わり得ると考えたいものです。富士山を人間の内面を象徴するものと比ゆて見直してみたいと思います。

#### ♪矛盾することわざに関する一つの見方

日本のことわざには矛盾する両極の意味の句が必ずと言ってよいほど存在します。これらを日本人の社会的行動原理と関連させて統合的に分析すると、「人生いろいろ…」というように矛盾両極許容並列（矛盾する両極端な意味の句双方をあり得ることと受け入れ、矛盾両極の意の句を並列的に解釈する）こともできます。多くの研究者が様々な著作で日本人の社会的行動原理を単に曖昧ではなく「重層的雑多的多面性、多重構造、本音と建て前、表と裏、熱しやすく冷めやすい、へつらいとおごり」などと象徴的に形容しています。

こうした見方がある一方、次のような見方もあります。それは“not only A, but also B”（Aである。しかしまたBでもある）、すなわち矛盾両極許容統合（矛盾する両極端な意味の句双方をあり得ることと受け入れ、矛盾両極の意の句を統合的に解釈する）と視る、より高度な認知的情報処理です。矛盾する両極の意味に関して判断支点を固定せず、時と場合、状況に応じて、臨機応変に判断支点を柔軟に変化させ、瞬時に〈イ・イ・カ・ゲ・ン〉ではなく〈好い加減〉に判断・決断する。あるいは〈テ・キ・ト・ウ〉ではなく、文字通り〈適当〉に収まるように瞬時に照準を合わせて判断・決断するという社会的行動原理です。「思慮分別、けじめをつける、調和、相対主義、状況主義、バランス感覚、柔軟」などの肯定的意味合いのキーワードと共に「便宜主義、非原理的、まあまあ、ほどほど、体裁、世間体、大勢順応、公私混交」など否定的キーワードが指摘されてもいます。ここでも矛盾両極許容は内在していると言えます。

#### ♪第一印象から内面の充実へ

第一印象に対して、視点を換えて人間が内面から発達・成長・向上する可能性について考えてみます。その方法に「本、人、旅が教養を培う」ということばがあります。成人として社会生活をしていくにあたって「知情意」の「知能」において「知識」を蓄積して「知恵」を得て、さらに「知性」にまで昇華し、様々な人間関係をスムーズに行うべく「社会的な適応行動」を身につけるには、一に読書、二に人間関係（相互作用）の訓練、三に旅行は見聞

を広めるべく道程として「旅することは生きること」とされ、人生そのものを象徴するものとされています。「本、人、旅の3つからしか学習できない」とさえ言われます。

読書について矛盾両極の意味のことわざをデータとして考えてみましょう。矛盾両極のAに相当する句「読書百遍意自ずから通ず」「読書百遍義自ずからあらわる」、あるいは「読書万卷を破る」は共通して「訓練・練習（量）」が重視されます。しかしまた、Bとしていくら学習しても「論語読みの論語知らず」となることもあり、「論に負けても実に勝て」という異なる価値観もあります。矛盾両極の意味を許容して双方を統合してみると、単に本を多く読めば内面の向上が得られるというわけではなく、例えば世渡り（実に勝てというように現実世間で生きていく）には知識を集積して知恵と成すだけではなく、人と人との相互作用において主体的にバランスを取り、善悪、好悪だけではなく、利害をも考慮して統合的に判断基準を調整して知性豊かな大人（知的大人）として行動することでこそ、内面の向上を成し遂げられると集約できます。

人間関係の訓練とは、人と人との＜相互作用＞、コミュニケーションの発達が人間の内面の向上そのもの、文字どおりということです。矛盾両極の意味を許容して複数句を統合してみましょう。人間関係においては、A「下いびりの上へつらい」とB「弱きを助け、強きを挫く／強きを挫き、弱きを助く」の矛盾両極に関して、「両方たつれば身が持たぬ」（両方の言い分を聞いて、両方が良いようにするのは難しいという意味）ではあるが、「角じゃ世間が渡られぬ」であり、「上に交わりてへつらわず、下に交わりておごらず」、あるいは「両方聞いて下知をなせ」（争いを裁くには両方の訴えを公平に聞いて裁決しないと争い事は治まらないという意味）というように柔軟な対応を主体的に判断・決断するとする統合がコンセプトとなります。

見聞を広める旅行には次元ごとの旅が考えられます。0次元の「点の旅」は、何処に行ってきたというだけの旅行です。1次元の「線の旅」は、修学旅行などのように何処と何処に行ってきたという旅行です。2次元の「平面の旅」は、宿泊を伴う旅行と言えましょうか。湯治や現代では海外旅行などのようにある場所に宿泊すれば周囲の特徴が読み取れ、同じ場所でも心情や時間によって違う風景が醸し出される可能性があります。3次元の「立体の旅」は、特定場所にとどまり、なおかつ人と人との＜相互作用＞を持つ旅行です。旅先での邂逅を如何にするかは、「旅は情け人は心」でそのひと本人の行動により如何様にも可能性は広がります。「ゆっくり行くほど遠くまで行ける」のかもしれない。

次元の旅は低次元とか高次元と区分できますが、感情において好ましい、快となれるのは必ずしも高次元の旅とは限りません。「旅は憂いもの辛いもの」は旅に出るとかつては何かと不便で、知る人もないという条件での心情です。旅はそうした不安の中でこそ「人の誠は旅にて見ゆる」「旅は道連れ世は情け」という可能性を持つものなのでしょう。さらなる高次元の旅があり得るからこそ「可愛い子には旅をさせよ」とされてきたのでしょう。

#### ♪裾野が広く、高さを併せ持ち、なおかつシンメトリーな富士山

富士山は外見として3次元と見做されていますが、そこに精神性が内在するさらなる高次元の存在と見立てることができます。人柄を知性の面から否定的に評する句に「間口ばかりで奥行きがない」（知識は広く博学であるが奥行きがないとは知恵は浅く、重みがない、軽々しい）とする句があります。ところで、富士山は裾野が広く、奥行きや高さが日本一で「間口ばかりか奥行きもある」存在としてのシンボルです。裾野の広さは広い教養がある安定感を象徴し、奥行きや高さは専門性、習熟度の高さを意味します。

裾野を広げるにはA「好きこそものの上手なれ」「好きは上手の元」「道は好む所によって安し」というように好きという感情に伴う意欲が大切とされます。これに対してB「下手の横好き」「下手の馬鹿好き」「下手の悪好き」とただ好きなことだけをするのでは単なる趣味や極端には徒労に終わってしまうとも言います。ABを統合すると純粹に好きなことに打ち込んで、自分にとってだけでなく社会貢献できるようなことを自律的に行えば成功に達すると解釈できます。「ゆっくり行くほど遠くまで行ける」とも言われます。

専門性、習熟度を高めるには「田作道は農に聞け」「海のことは漁師に聞け(舟子に問え)」、「山のことは樵夫に聞け」「餅は餅屋」「馬は馬方」「仏の沙汰は僧が知る」「弓矢の道は武士が知る」「蛇の道は蛇」「蛇の道は朽縄が知る」「芸(商売)は道によって賢し」「船は船頭に任せよ」「酒は酒屋に茶は茶屋に」「病は医者歌は公家」「刀は刀屋」「弱くても相撲取り」「悪魔は悪魔を知る」と実に沢山の類句があります。これに対して、反句というよりも対句に「左官の垣根」があるのみです。それぞれの人のそれぞれの得意なものこそが専門性、習熟度を上げることと言えそうです。ちなみに、八ヶ岳のように裾野が広く、頂上が高くても複数であれば、気が多いとか「器用貧乏」などで見られると比喩できましよう。

社会適応の順序は第一に間口を広げて安定観のある人間像を志向して、そのプロセスで専門性、得意なものの習熟度を高めることです。また「人のふり見て我ふり直せ」「人こそ人の鏡」、「人の上見て我が身を思え」というように自己内省によりアイデンティティを確立していくことです。「機を見るに敏」「機に因りて法を説け」という視点をも大切です。

裾野を広く、奥行きを深く、さらに専門的な高さを求めるには「芝居は一日の早学問」という句が参考になります。昔であれば芝居が世間の知恵、社会的規範・規制、すなわち社会性を身につけるための情報源であるという意味です。かつての芝居は奥行きを深めるとか高さを極めるためだけでなく「酸いも甘いもかみ分ける」ことができる社会性が大いに含まれていたのです。現代であればいわゆる堅苦しい、「四角四面」な学習や応対をするばかりではなく、例えば映画、演劇、漫画・アニメ、ゲームやテレビ、小説、音楽など幅広い情報源を活用して社会性を身に付けることでしょう。

### ♪「富士山のようにになりたい」

日本社会は「嘘で固めた世の中」「世間は張物」「金が敵の世の中」「水清ければ魚棲まず」、「両方立つれば身がたたぬ」、「上手は下手の手本」「下手は上手の手本」、あるいは「一枚の紙にも表裏がある」などと「一筋縄ではいかぬ」社会であると言えましょう。しかも「世の中は三日見ぬ間の桜かな」「浮世は回る水車」と昔も今も変動の激しい社会です。

「世間知らずの高枕」「知らぬが仏」などとならないためにも、「富士山は美しい」と思うばかりではなく、折あらば富士山を眺めながら「富士山のようにになりたい」と考える今日この頃です。

## 第2章 「好・信・楽」を伝えたい —松坂城の一期一会—

蟻川 剛

歩き旅で、名古屋から伊勢路に向かったのは、2011年3月のことでした。その時は、四日市で1泊して目的地の津に到達しました。そして、翌2012年の2月の下旬、再び早春の伊勢へ出かけました。次の目標は、伊勢神宮でした。

津の市街地を出て南下すると、田園地帯になります。しかし、伊勢神宮へむかう街道は、次々と集落を通っていきます。すると、前垂れの深い軒がせり出している伊勢独特の家屋が目立つようになり、その玄関の上には、「笑門」と書かれた札をつけた飾りが掲げられていて、東京では見られない景観に、伊勢へ来たな、という感じを強くしました。

やがて、大きな町が見えてきました。再び出会った線路を過ぎると、松阪の町にやってきました。更に阪内川の橋を渡ると、町の中心部へと入っていき、魚町にある本居宣長の旧宅跡をたずねました。既に旧宅は移築されていて、塀に囲まれた敷地にその跡をしのぶだけになっていました。見学をして道にもどると、近くの松阪牛料理の老舗から出てきた機嫌の良さそうな数人がゾロゾロと歩いていました。それを横目に城へと向かいました。

立派な石垣の見える松坂城の入口からは、石垣に沿って続く上り坂を行きました。案内板に従って進むと、小さい広場に出て、その広場に面して、二階建ての日本家屋がありました。それが、宣長の旧宅「鈴屋（すずのや）」でした。その家屋をしばらく眺めていると、一人の中年の男性が近づいてきました。ソフト帽をかぶり、きちんとした身なりをしていましたが、一見して観光客とは違う雰囲気、すぐにガイドさんだと想像できました。その方は、鈴屋の面している広場の反対側に設けられている見学場所を教えてくださいました。言われた通りそこへ上がると、旧宅の2階の書斎にあたる部屋がよく見えました。障子が開けられて明るい部屋の床の間には、「縣居大人之靈位」と書かれた掛け軸がよく見えました。広場へ下りてくると、ガイドさんに言われました。

「もう少し人が集まったら案内しますから、記念館を見学してきてください。」

確かに周りを見ると誰もいません。言われた通りすぐ近くの記念館に行きました。

「本居宣長記念館」には、宣長の著作や蔵書の和とじの本が、幾つも積み重ねられた山となって、ガラスケースの中に納められて、その多さに驚きました。その中には「手沢本（しゅたくぼん）」とよばれる、指のあとのついた本が展示されていて、宣長がくり返して研究していたことを実感させられて、感動しました。

再び鈴屋の前にもどると、2組の男女のペアが立っていました。待っていてくれたかのように、五人を連れてガイドさんの案内が始まりました。旧宅の中へ入って、本居宣長の生い立ちから多くの業績の数々を残した生涯の他、建物の構造や二階へ上がる階段などについて、流れるような説明が続きました。そして、建物を通りぬけると、城内の石垣の上に出て、松阪の城下町を造り上げた蒲生氏郷の話も丁寧に加えてガイドは終わりました。

「これで説明は、終了です。ありがとうございました。」

拍手が起こりました。

「最後に、みなさんに本居宣長さんの言葉を贈りたいと思います。」

と言って、葉書よりひとまわり小さいカードを五人それぞれに配り、それを読みました。

そして、おわりの1行についてふれました。

「人生は、好・信・楽（こうしんらく）、宣長さんの言葉です。宣長さんが歩んだ学問の道を自ら振り返ったとき、はじめは好きで始めたこの学問、続けて深めていくうちに、これこそ自分のやるべきことと信じて励んだ。そして、最後には、この学問をすることが、楽しくて仕方がなくなったということです。これが、好・信・楽ということです。是非、この言葉を覚えていてください。」

話し終わって、一人一人に名刺を配ってくれました。色刷りの顔写真入りのもので、「松坂城の語り部」に続いてSさんの名前がありました。裏返すと「人生は、好・信・楽だよ」と印刷されていました。Sさんの苗字を見て、思わず語りかけました。

「Sさんは、城という字がついていますね。それで城の語り部とは、縁があるんですね。」

Sさんは、それを聞いて微笑みました。

Sさんと別れて、城の坂を下りて、東への旅を続けました。そして、伊勢神宮から帰京すると、懇切丁寧で楽しいガイドのお礼の葉書を送りました。翌年の正月には、Sさんから年賀状が届きました。その末尾には、「好・信・楽のSです」を書いてありました。その次の年の年賀状にも、そう書いてありました。Sさんの「好・信・楽」への深く強い思いを感じざるを得ませんでした。

「人生は、好・信・楽」、四字熟語ほど三字の名言は思い浮かびません。「真善美」「序破急」「運純根」が、せいぜいです。その「好信楽」ですが、はじめは聞き流してしまいそうでしたが、Sさんの熱意に、その意味の深さを思うようになりました。

一つは、仕事についてです。小学校の教員を定年まで務め、更に時間講師として子ども達の授業に携わっています。やはり、この仕事を好きで選びました。運よく好む仕事に就くことができましたが、苦労も尽きません。しかし、仕事を続けるうちに、これこそ自分のやるべきことではないか、と信じて励んできたものと思われまます。そして、時がたつにつれ、授業を考える時、子どもの反応を考えることが楽しくなりました。こういう授業をすれば、子どもはどう反応するだろうか、それならこうしてみようか、など失敗もくり返していますが、一所懸命あれこれ考えることは、楽しいこととなりました。「好信楽」です。

仕事の他にも、打ち込んでいる「歩き旅」という趣味も同様です。旅をすることは、新しい土地や暮らしなどを見ることができて大好きです。あいにく自動車の運転ができないので、歩いて行けばいいと好きな旅を始めました。長年続けて話題にしていると、おかしなことをしていると思われがちです。苦労もありますが、他の人にどう思われようと、自分の打ち込むことはこれしかないと思っています。今では、地図を見ながら、次に歩く道筋を考えている時、どんな景色が待っているのか、どんな発見があるのか、想像がどんどん広がって楽しくて仕方がありません。これも「好信楽」です。

どなたもそういう道を歩んでいるのではないのでしょうか。今、進んでいる道は、自分が好きだから入った道。やがて、これこそ自分のやるべきことだと信じて打ち込むこととなり、楽しい日々になっていくのです。これが「好信楽」です。まだ若い方は、好きな道や信じる道の途上かも知れません。これも一層励むことによって、楽しむという境地に至ります。「人生は、好・信・楽」といっても、自分の人生が終わってから、人生を振り返って、ああそうだったというのは、ナンセンスです。今生きている人生が、「好信楽」であると考えたいものです。Sさんに教えていただいた、本居宣長の「人生は、好・信・楽」という言葉は、素

晴らしいと思います。

Sさんとの年賀状での交流を続けながら、「好信楽」という言葉を忘れることなく、歩き旅を進めていました。四国、九州、東北地方へと足を伸ばしていきましたが、本州の南に大きく張り出している紀伊半島に興味をわいてきました。南紀の海、潮岬、熊野古道、見てみたいものは、様々ありました。そればかりでなく、紀伊半島を周回するとなれば、伊勢もその一端となり、松阪を通る時に、あのSさんと再会できて、その後のことを話せるという楽しみがふくらみました。

紀伊半島を回るとなると、東京から新大阪へ行って和歌山側から入るのが便利だと、和歌山から南下を始めました。有田、御坊、白浜、田辺と明るい海岸線を順調に進みました。そして、2014年6月、いよいよ念願の潮岬に立った後、新宮までやってきました。ここまで来れば三重県側から進む方が便利となり、松阪の近くから紀勢線を南下する計画を立てることになりました。紀伊半島周回が実現に向けて近づいてきた喜びとともに、松阪のお城に立ち寄って、Sさんに再会できることがいよいよ現実味を帯びてきました。翌年の春に出かけるとして、その前に連絡をしようと考えていました。そして、再会した時のSさんの驚いた顔や笑顔を想像しました。

明ければ春という冬の十一月、何の前ぶれもなく、一枚の喪中葉書が届きました。それは、6月にSさんが亡くなったという奥様からのものでした。呆然とするしかありませんでした。もう、あの「好・信・楽のS」さんに会うことがかなわなくなっていました。

翌2015年5月、三重県側から紀伊半島めぐりの旅に出ました。歩き旅の出発地点の徳和駅の手前の松阪駅にも停車しました。しかし、松阪駅で降りることはしませんでした。降りても行くあてがありません。列車の座席に駅舎の方に向かって座りました。駅舎の方向の先に、松坂城があるからです。目をつぶって、心の中で手を合わせて、Sさんに「お別れ」をしました。扉の閉じる音がして、ガタンと揺れると、列車が次の駅へと、松阪駅をゆっくり離れていきます。もう、Sさんに会うことはできませんが、「人生は、好・信・楽」という言葉は忘れません。本当にいい言葉です。Sさんに教えてもらったこの言葉は、機会があれば多くの人に伝えていきたいと思います。

拙句ですが、伊勢の旅の思い出の句

伊勢四句 「笑門（しょうもん）」の飾りありけり伊勢は春  
春の気を入れて「鈴屋（すずのや）」鎮まれり  
春の旅外宮へ三里祓川（はらいがわ）  
内宮の御帳（みとばり）揺れて春兆す 剛 (2012、2)

そして、挽歌の句

霜月の喪中葉書の別れかな 剛 (2014、11)

### 第3章 動物のことわざ、そして犬のことわざ色々あちこち

時田 昌瑞

#### ◆世界のことわざでの動物の位置

ことわざには種々様々なものが言及されている。なかでも犬や猫などの動物の割合は高いものと見られているが、実際のところはどうなのか。具体的に調べたものとしては亜細亜大学ことわざ比較研究プロジェクト『世界 14 言語 動物ことわざワールド 捕らぬ狸は皮算用?』が世界の 14 言語のことわざの動物を主題にしてまとめている。その付録に動物ことわざトップ 10 の言語別の一覧が掲載されていて、1 位を犬とする言語が 5、馬が 3、鶏が 2、虎、魚、鳥、ロバがそれぞれ 1 というデータが示されている。2 位は犬が 5、馬と猫が 2、象が 1。3 位は犬が 3、馬、虎、牛、ロバが 2、鶏、狼、豚が 1 であった。ここでは犬と馬が抜きん出て多いことがわかる。また、同付録には各言語の円グラフも収められていて、各々の言語においてどんな動物が何パーセントを占めるか明示されている。例えばモンゴル語では馬 33%、犬 19%、牛 13%、狼 8% で全体の 4 分の 3 を占める。タイ語になると魚 14.2%、牛 12.5%、虎 12.5%、犬 11.6%、鶏 10.7%、豚 8% となるし、ドイツ語は犬 19.5%、猫 11.4%、馬 10.4%、狼 9.4%、牛 9.4% となり、三者は三様であるということが明示されている。ただし、それぞれの動物の割合は数値で明示されているのだが、動物が登場することわざ自体の数量やことわざ全体における動物ものの占める割合は不明であった。そこで、動物ものがことわざ全体で絞める割合を調べてみることにした。

#### ◆動物ことわざの占める割合

この問題に迫るため手持ちの文献に当たり調べてみた。どの動物の頻度が高いかを知るために上位の 3 位までのものと、亜細亜大学の調査では犬が一番であるので、犬の順位も付言することにした。文献の選定は出来るだけ広範囲に渡るものを第一に、次に収録語数が 1000 程度の辞典を主に選んだ。万を超すような辞典になると一般的ではない語句が多くなり、この手の調査には向いていないと考えたからだ。収録語数は明示されていないものは概数を示した。

- ① 英語：『現代英語ことわざ辞典』（戸田豊 リーベル出版 2003 年）は全 1282 項目のうち動物ものが 164 の 12.8%。犬は 28 点で 1 位。2 位が馬の 24、3 位が鳥で 15。
- ② スペイン語：『スペイン語諺読本』（並松征四郎 駿河台出版社 1986 年）は全 1370 項目のうち 155 の 11.3%。犬は 25 点の 1 位。2 位が鳥の 14、3 位が鶏で 12。
- ③ ポルトガル語：『ポルトガル語ことわざ辞典』（高橋宏昭 東洋出版 2015 年）は全 1436 項目のうち 285 で 19.8%。犬は 23 点で 1 位だが、猫と鶏も同数で 1 位。
- ④ ロシア語：『ロシア語名言・名句・ことわざ辞典』（八島雅彦 東洋書店 2011 年）では全 1174 項目のうち 185 で 15.8%。犬は 18 点で 1 位。2 位は狼の 16、3 位が馬で 14。
- ⑤ チェコ語：『チェコ語 諺・成句辞典』（菊池正雄 武田書店 2001 年）は約 1300 項目のうち 97 の 7.3%。犬は 12 点の 1 位。2 位は鳥の 9、3 位が狼の 6。
- ⑥ ユダヤ民族：『なるほど! ユダヤの格言・ユダヤの知恵』（滝川義人 日本実業出版社 1995 年）約 600 項目のうち 30 で 5%。犬は 9 点で 1 位。猫、馬、虫、蛇が 2 点の同数で 2 位。
- ⑦ マサイ族（アフリカ東部）：『夜には、けものがあるき 昼には、昼のできごとがゆく』

- (杜由木 東京図書出版 2015年) 全 291 のうち 55 ケで 18.9%。犬は 1 ケで 9 位。1 位は牛の 25 で 2 位が山羊の 5、3 位が鳥で 4。
- ⑧ キクユ族 (アフリカ東部) : 『夜には、けものがあるき 昼には、昼のできごとがゆく』 (杜由木 東京図書出版 2015年) 約 500 収録のうち 67 ケの 13%。犬は 0。1 位は山羊の 17、2 位が牛で 13、3 位ハイエナの 8。動物は全部で 20 種類いるが馬や猫はいない。
- ⑨ ヌビア (アフリカの意) : 『ヌビア —アフリカの智慧の言葉—』 (レイ・クワミ・ボストン 宝島社 2003年) 118 収録のうち 24 ケで 20.3%。犬は 1 点のみ、1 位は鳥と鶏で各 3 点、次が亀と山羊の 2 点。動物は 19 種類。
- ⑩ アラブ: 『アラブの格言』 (曾野綾子 新潮社 2003年) 約 500 の収録のうち 92 で 18.4%。犬は 14 の 1 位。2 位がロバで 12、3 位がラクダの 10。
- ⑪ ペルシア : 『ペルシア語ことわざ用法辞典』 (勝藤猛 ハーシェム・ラジャブザーデ 大学書林 1995年) 200 項目のうち 47 で 23%。犬は 2 ケの 4 位。1 位は猫の 8 で、2 位はロバの 6、3 位が蛇。
- ⑫ タミール語 : 『勇気をくれるインドのことわざ』 (ニルマラ純子 共栄書房 2013年) 全 160 のうち 26 で 16.2%。1 位は猫で 6、犬は 2 位だが同位が 6 種もある。
- ⑬ モンゴル語 『モンゴル語ことわざ用法辞典』 (塩谷茂樹 E. プレブジャブ 大学書林 2006年) 全 200 項目のうち 86 ケで 43%。犬は 3 位の 7。1 位は馬の 19、2 位が牛の 11。
- ⑭ タイ語: 『タイ語ことわざ用法辞典』 (岩城雄次郎 齊藤スワニー 大学書林 1998年) 全 172 のうち 58 ケの 33.7%。犬は 5 位で 3。1 位は虎の 7、魚が 2 位で 6。牛と象が 3 位で 5。
- ⑮ インドネシア語: 『インドネシアのことわざ 1320 と日本のことわざ』 (中川重徳 自刊) 全 1320 のうち 293 で 22.2%。犬は 13 の 7 位。1 位は鶏 28、2 位が魚 21、3 位は水牛と象で 19。
- ⑯ 台湾 : 『台湾のことわざ』 (陳宗顯 東方出版 1994年) 全 200 のうち 53 で 26.5%。犬は 6 で 2 位。1 位は牛の 8 点、3 位が馬で 5。
- ⑰ 中国 : 『中国の俗諺』 (田中清一郎 白水社 1979年) 約 1000 のうち 214 の 21.4%。犬は 35 で 1 位。2 位が馬 28、3 位は虎で 18。
- ⑱ 韓国: 『日韓類似ことわざ辞典』 (賈恵京 白帝社 2007年) 全 576 のうち 84 で 14.6%。犬は 12 の 1 位。2 位は虎 8、3 位が鼠 7。
- ⑲ 日本 : 『岩波ことわざ辞典』 (時田昌瑞 岩波書店 2000年) 約 1500 のうち 372 で 24.8%。犬は 23 の 1 位。2 位が牛の 18、3 位が馬で 17。

以上を大まかにまとめてみれば、動物に関することわざは多少の違いはあるものの、どの地域にもみることができる。ジャンル別にすれば最も割合の高い主要なジャンルとなっているといえる。ただ、一つのことわざに複数の動物が出てくる場合が少なくないので、実際のパーセンテージは 2%程度低く見なければならぬ。

19 の言語で犬を 1 位とするものは 10 言語で 2 位が 2 言語、3~5 位がそれぞれ 1 言語、7 位、9 位、10 位以下、番外がそれぞれ 1 言語。犬以外では、1 位を鶏と猫とするものが 3 言語、牛が 2 言語であることから、犬が断然の第 1 位ということになる。また、3 位までに

入る数を較べても犬が 12、馬と牛が 6、鳥が 5、鶏と猫が 4 という結果であった。但し、地域による違いは認められ、アフリカだけが犬の存在は低いものになっている。

また、地域特有の動物もみられる地域性が存在することも窺われる。例えば、アフリカではハイエナ・キリン・ハゲワシなどの他に地域特有の動物もでてくる。タイやインドネシアの東南アジアでは魚・虎・水牛・象などの頻度が犬や猫より高い。また、モンゴルでは馬の頻度が突出して高く 2 位の牛の 2 倍程度になっている。その他の目につくものでは、アラブでのラクダ、ポルトガルでのロバ、ロシアでの狼などが目立った存在だし、マサイ族での牛は 2 位の山羊の 5 倍に上る。

ことわざ全般で動物のものが主なものであり、なかでも犬が群を抜いた存在であることから、犬に絞って話をすすめることにしたい。

#### ◆犬のことわざに関するもろもろ

##### a)世界最古の犬のことわざ：

紀元前 4000～5000 年のシュメール (今のイラク辺り) 人が残したくさび形文字でかかれたものがある。○鍛冶屋の犬は金床をひっくり返すことはできなかった。代わりに水ガメをひっくり返した。○牛が耕している。犬が畝をこわしている。○ちんちんしながら犬が家から家に入っていく。○犬は動く、サソリも動く。なのに私の夫は動かない (怠け者の夫をもつ妻の愚痴) ○雌犬が言いました。黄色であろうが、まだらであろうが、あなたたちは、私のかわいい子どもたち (母の愛)

##### b)日本での古いもの：

日本には 300 以上の犬が関わることわざがあるが、江戸期より前のものに限ると数量は知れている。○犬と猿 (仲の悪いものの譬え)；平安時代の『今昔物語』など。鎌倉期では○犬の星をまもる (高望みする)；『愚管抄』、○犬の雷をかむ (不可能なことの譬え)；日蓮『撰時抄』、○犬の猿をかみ、蛇の<sup>かえる</sup>蝦をのみ、鷹の雉を、獅子王の兔を殺す (強者が弱者をいたぶる)；日蓮『諫暁八幡抄』、○犬の主に尾を振る (強い者にへつらうこと)；日蓮『開目抄』、○癡犬の枯骨をねぶる如し (何の益もないこと)；道元『正蔵眼蔵』。

##### c)生命力の長いことわざは何？

江戸期から続くもの：○一犬虚を吠えれば万犬実を伝う ○犬になるとも大家の犬 ○犬に論語 ○犬も歩けば棒に当たる ○狡兎死んで良狗烹らる ○夫婦喧嘩は犬も食わぬ ○飼い犬に手を噛まれる

##### d)珍しいことわざは何？

○狼群に伍する一匹のむく犬 ○犬に劣れど猫に優る ○犬に肉の番をさせる ○犬の糞でもつかんで起きる ○犬の糞も焼き味噌も見分けず ○犬耳に念仏 ○飼い犬のスープをすする ○虎皮に犬糞をつつむ ○貂に続くるに狗尾を以てする ○鶏に嫁すれば鶏を逐い犬に嫁すれば犬を逐う ○二本差しと犬の糞を怖がっちゃ江戸の道は歩かれぬ ○痩せ犬の食い争い

戦後になって見られ始めたもの：○負け犬の遠吠え ○水に落ちた犬を打て ○犬は人間の最良の友 ○犬が人に噛みついていてもニュースにならないけれど人が犬に噛みつけばニュースになる ○犬好きに悪人なし ○尻尾が犬を振る

##### f)使用頻度の高いものは何？

1992年から始めたメディア調査のデータに基づくものでベスト8を挙げる。末尾の数字は使用例数。①犬も歩けば棒に当たる 69 ②犬骨折って鷹の餌食 53 ③羊頭狗肉 48 ④一犬虚に吠えれば万犬実を伝う 47 ⑤夫婦喧嘩は犬も食わぬ 45 ⑥犬と猿 38 ⑦飼い犬に手をかまれる 32 ⑧犬は三日飼えば恩を忘れぬ 15

g) 主なことわざの英語との比較

○犬も歩けば棒に当たる—①駆け回る犬は骨を見つける (The dog that trots about finds a bone) ②どの犬にも得意の時がある (Every dog has his day)

○犬猿の仲—○猫と犬のような仲 (To agree like cats and dogs)

○夫婦喧嘩は犬も食わぬ—○恋人同士の喧嘩はすぐに収まる (Lovers' quarrels are soon mended)

○犬に論語—○死んだ馬に讃美歌を歌う (Sing psalms to a dead horse)

○犬に肴の番—○羊の番を狼に頼む (To set the wolf to keep the sheep)

○犬になるなら大家の犬になれ—○よい主人に仕えればよい報酬を貰える (He that serves a good master shall have good wages)

○犬が西向きゃ尾は東—○カラスが飛べば尾は後ろ (When the crow flies her tail follows)

○犬は人につき猫は家につく—○犬は顔を、猫は場所を忘れない (Dogs remember faces, cats places)

むすびに代えて

動物のことわざは、その多くは人に譬えられているものの、肯定的な意味合いのものは少ない。犬の場合も同じ。歴史的に顧みれば、かつては番犬や猟犬として人間にとって有用であったにも拘わらずことわざでの評価は高くない。ここでは紙幅の関係で少数派になる肯定的なものに少し目を向けてみることにする。

日本では、「犬一代狸一匹」(大きな獲物は一生に一度くらいしかチャンスはない)、「犬は門を守り武士は国を守る」(それぞれに役割というものがあ)、 「犬も朋輩鷹も朋輩」(立場の違いを超えて協力する)、「犬も人を見れば尾を振る」(人からは親しみをもたれるようにすること) などがある。

外国では、「犬は人間の最高の友」「人の最高の友は犬」「犬を愛さない者は紳士にあらず」というものが、どれも英語にある。ロシアにも「犬は人間の心変わらぬ友」とよく似たものがある。これらは犬のことわざの中で最も高く評価された例だ。その他ではモンゴルに「犬が良ければ羊が増え、温和な母には人が集まる」、フランスに「良い犬はへまな吠え方をしない」(育ちのよい者は間違っただけしゃべり方はしない)、ポルトガル「犬のような友より友のような犬がまし」、ユダヤ「貴族は馬と犬を大切にし、ユダヤ人は妻子を心配する」という類が目につく。

だが、現代は時代も変わりつつあり、犬や猫は単なるペットの位置にとどまらず、飼い主にとっては人間以上の存在になってきている。家畜やペットの範疇のことわざを超えた新しい言い回しが生み出される状況が到来していると考えられる。

## 第4章 当たるも八卦当たらぬも八卦

藤村 美織

占いがわりと好きなほうです。よい内容であれば、「当たるね」と信じることにして、悪い内容であれば、「当たらない」と即、忘れるので害はありません。学生時代に、叔母が、四柱推命という、生年日時に基づく占いをしてくれました。それによると、簡単に言えば、生涯、私は食べ物に困ることなく、幸せな一生を送るということでした。どうでしょうか？まだわかりません。今の私の日常はといえば、一難去ってまた一難であり、動き回っては、虫の息になることを繰り返しています。棺桶に片足を突っ込んでいるとはまだ思えません。が、人生の春、夏は過ぎて、秋の気配が漂ってきました。

しかし、天高く馬肥ゆる秋、美しい季節はこれからという感じもあります。昨年、人工言語のエスペラントの大会で韓国に行きました。そのとき、エスペラントを学ぶ視覚障害者のグループに会いました。そのグループの会長は、占い師協会の会長でした。韓国では、視覚障害者の職業として、マッサージだけでなく、占いが今でも認められています。この機会に私は占ってもらうことにして、生年月日を言うと、データがパソコンに打ち込まれました。それをもとに計算が行われて、まず、「今、勉強運がついていますね」と言われたので、笑ってしまいました。(仕事運とか、金運とか、恋愛運ではないのか？勉強運なんて初めて聞いた。確かに、ドイツ語と格闘して、辞書や本で調べ物ばかりしているけれど)。さらに驚いたことに、「64歳から10年間、経済的にも社会的にも最もよくなります」と。(マジか?)あと何か言われたと思いますが、今、それ以外のメモはなく、記憶にもありません。自分の近未来が下り坂でなくて、上り坂というイメージだけで充分でした。

### 1. 類は友を呼ぶ

今年は戌年で、私は年女です。同級生の多くは戌年であり、母も夫も戌年です。でも同じイヌといっても、ひいき目に見て、母は柴犬、夫は秋田犬の雑種、私はプードルという感じでしょうか。それぞれタイプがまったく違います。ところで、目の不自由な夫とともに参加している会に、「盲界・戌の会」というのがあって、年に一度、視覚障害者と関係者で戌年生まれが集まります。盲導犬のユーザーや犬の友達で、参加希望する人も拒みませんが、正会員は戌年生まれです。子犬から老犬まで、五～六代に渡って、一人ずつ近況報告をしながら、大いに吠えて飲む会です。数年前、私は戌年の性格とその年の運勢を調べて皆に披露したことがありました。今、その性格を新たに記してみますので、周りの戌年の人をちょっと思い浮かべてみて下さい。

「犬も歩けば棒に当たる。これをポジティブにとらえ、よく歩く。子供のころから、かけっこ、ゲーム、勉強などで、人と好んで競い合う。粘り強く、誠実である。犬は三日飼えば、三年恩を忘れぬと言うが、恩義を忘れず、自分から裏切らない。しかし恨みも忘れず、嫌いな人はとことん嫌う。正義の味方で働き者だが、骨折り損のくたびれ儲けも多い。尊敬する上司や仲間には忠実で、信頼を得る。物静かに見えて、短気でけっこう怒りっぽい。疑心暗鬼に陥りやすく、虫の居所が悪いこともある。さらに大の負けず嫌いで、間違いをなかなか認めない。社交的なようで、実はあまり大勢でいることを好まない。気を許した人たちとは

大いに楽しむ。家庭を大切にすることが、家事は苦手で、掃除はできない」。

戌の会で、こんな文章を読み上げたとき、「当たっている！」という声があちこちから飛びました。ちなみに盲界で干支の会があるのは戌年だけとのこと。イヌは群れるという習性からでしょうか。酒は百薬の長をモットーとする、よきリーダーがいたことも大きい理由でしょう。戌の会の会長を長く務めた A さんは、今年春、誕生日を待たずに残念ながら 95 歳で亡くなりました。この夏に、会長の追悼をかねて戌の会が開かれたばかりです。

## 2. 犬の骨かくし

「あなたはイヌ派か、ネコ派か？」と話題になることがあります。かつて、私はイヌ派でした。今、私は、犬も猫も同じように大好きです。物心ついたとき、家には柴犬がいました。小学生のときに犬がいなくなり、セキセイインコや文鳥を大切に育てていました。ある晴れた日、鳥かごをベランダに出して、猫にやられたことを忘れることはありません。それ以来、猫は敵になりました。やがて、犬をまた飼いたいと親にせがみ、獣医にビーグルを頼んでもらいました。ところが子犬を待つ間に、叔母が捨て犬を拾ってきたため、その雑種を飼うことにしたのです。ポンと名付けた雄犬が、私の中学 1 年から大学 4 年までの一時代、傍らにいたことになりました。たくさんの思い出があります。

散歩にも時々連れて行きましたが、番犬として、庭で放し飼いにしていました。当時は、ドッグフードがまだ主流ではなくて、残飯を与えていたものです。おやつに何かを用意すると大喜びでした。特に犬用の骨に目がなく、しばらく噛んで、遊んで、そのうちにどこかに埋めてしまいました。こうなると、鼻がもう効きません。一度、埋めると出てくることはありませんでした。この印象的な光景は、のちに私の創作ことわざ、「犬の骨かくし」につながりました。これは、何か大切なものを特別にしまっておきましょうと、どこかに置いて、すっかり忘れてしまうことを指します。そんなことが、私の日常でもよく起こり、「あー、犬の骨かくし、またやっちゃった。どこだっけ？」とつぶやくことになるのです。

## 3. 十四十色

その後、動物のいない時期をへて、猫と出会いました。きっかけは、猫との触れあいがテーマのドイツ語の本を日本語に訳したことでした。犬と通じ合えることは知っていましたが、まさか、猫とコミュニケーションがとれるのだろうか。私の愛鳥をくわえていった猫は許しがたい存在でした。坊主憎けりや袈裟まで憎いというように、猫の顔も、鳴き声も、動きも何もかも好きではありませんでした。それでも、本の内容は衝撃的で、猫との交流に心を動かされました。それで、『猫のいない人生なんて』（山手書房新社、1993 年）が出版された記念に、だまされたと思って猫を飼ってみようと思いついたのです。思い立ったが吉日で、私はすぐに獲得に動きました。

本の主人公の猫と同じキジトラにするか、あるいは黒猫か三毛猫も悪くない。どんな猫にしようかと考えて、獣医に相談しました。経緯は省きますが、結局、その毛色の違う三匹の子猫を一度に飼うことになったのです。そして今日に至るまで、猫を切らしたことがありません。十四以上の猫とすでに会って、私の生活は本のタイトル通りになりました。

猫も十四十色で、一匹ずつ毛皮の色や模様、性格も違って面白いです。十把一絡げには言えませんが、犬はもっと単純で、表現がわかりやすく、人間に完全に依存して生きています。

猫は人間に半分だけよりかかって、よほど自立しているといえるでしょう。犬のように尻尾を振らず、すましています。それでも、猫独特の甘え方というのがあって、その愛しさはたまりません。やはり猫と深い交わりを持てることがわかってきました。今は、野良猫出身のゴウというオス猫が私のそばにいて、文字通り、猫かわいがりしています。

#### 4. 窮すれば通ず

猫と同居して助かることに、留守番させられる点が挙げられます。犬の場合は、散歩が必要であり、日がな一日、室内に一匹で閉じ込めたままだと、寂しくて鳴き続けて、おかしくなることがあると聞きました。我が家では旅行に出るとき、三泊までなら、水とトイレの砂を多めに用意して、自動給餌器でしのぎます。それ以上留守にするときは、状況に応じて、実家か獣医に預けるか、妹や弟にキャットシッターを頼むことを繰り返してきました。今は、マンションなので完全室内飼いですが、少し前まで一軒家に住んでいて、猫たちは出入り自由にしていました。

あるとき、数日の旅行の際、気候がよいので、猫三匹を外に出したままで出かけたことがあります。ベランダにキャットフードを置いていき、二日に一回、妹に来てもらって、フードの追加を頼みました。そして旅行から帰ったとき、二匹がベランダでくつろいでいたのでまずほっとしたものです。ところが、白猫のナナがいません。どこかに遊びに行ったまなののでしょうか。数時間たっても戻らず、だんだん心配になってきました。事故にあってしまったのか？自分は何てことをしたのだろう。家のまわりを何度も見に行き、名前を呼びましたが、気配なし。今さら嘆いても後の祭りでもはや祈るしかありませんでした。苦しいときの神頼みです。藁にもすがる思いで、「迷い猫、戻る、おまじない」などとインターネットで検索しました。

そうすると、昔からの言い伝えで、和歌を書いて壁に貼るとよいという記事をいくつもみつけました。信じるものは救われる。早速、実行しました。

「立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる まつとし聞かば 今帰り来む」

中納言行平

これを書いて、壁に貼り付け、外にまた探しに行きました。近くの集合住宅の前に、大きな茂みがあって、そこで足を止めました。すでに絶望感に打ちひしがれながらも、一縷の望みをかけて、名前を呼びました。

「ナナちゃ～ん、いるの～？」

そうしたら、茂みのなかから、小さな鳴き声が何と戻ってきたのです。

「にゃ～、いるにゃ～ん」

えっ？まさか！びっくりしました。続けて、白い物体が近づいてきました。確かにナナでした。あとは、さあ帰ろうと説得して、ゆっくりと誘導して戻りました。めでたしめでたし。これは本当の話です。その後、旅行の際、猫を外に出して行くのはやめました。あんな心配は二度としたくないし、おまじないが何度も効くわけがありませんから。

#### 5. 星占いで一石二鳥

占いに話を戻します、欧米で占いといえば星占いです。日本でも星占いが載っている女性誌がけっこうあります。私は七夕生まれなので、蟹座です。ドイツ語で星占いのサイトを見

て (<https://mein.astrocenter.de/>)、「今日の星占い」というメールを毎日送ってもらうようにしました。これは無料で短い文章です。お金を払えば、もっと詳しい情報を得られるとのこと。とりあえず、この無料の分だけで、けっこう楽しめます。例えば、今日は何やってもうまくいくから、積極的に行こうとか、逆に、今日は油断大敵、念には念を入れよと促され、とにかく日々、励ましの言葉や、転ばぬ先の杖で忠告を受けられます。

さらに、何よりも注目するのは、私にとってドイツ語の表現です。その学習のためにという狙いもありました。そして星占いは、予想以上にことわざの宝庫でした。限られた短いスペースで、メッセージを伝えるために慣用句やことわざが実によく使われます。完全な形の場合もあれば、変化して、部分的に使われるなど、自由自在に現れます。最近のものから、論より証拠で五例をあげておきましょう。

- ★ **Vielleicht sind Sie so unentschlossen, dass Sie immer noch zögern, auch wenn die Würfel längst gefallen sind. Wenn Sie sich einmal entschieden haben, dann sollten Sie auch dabei bleiben.** (賽はとつくに投げられたとしても、あなたは心が決まらず、ためらっているかもしれません。一度決めたら、それに従って下さい)
  
- ★ **Wissen ist Macht, und so vieles entgeht unserer Aufmerksamkeit.** (知は力なりですが、私たちはとても多くのことに気がついていません)
  
- ★ **Sehen Sie den Wald, nicht nur die Bäume.** (木だけでなく森を見なさい)
  
- ★ **Seien Sie vorsichtig, es ist nicht alles Gold was glänzt!** (用心しなさい。光るものすべて金とは限りません)
  
- ★ **Sicherheit oder Veränderung? Haben Sie Geduld... Wie heißt es so schön: „Kommt Zeit, kommt Rat.“**(安全をとるか変更するか？今は我慢すること...こう言いますからね。「時が来れば策も来る。待てば海路の日和あり」)

説明は加えませんが、ことわざが自然に使われて、現代ドイツ語の一部であることがわかれると思います。日本語の雑誌の占いも同じかもしれません。こんな感じではないでしょうか。手前味噌ながら、織り姫星からのメッセージをお届けして、おしまいにします。

「今、思うように進まなくても、投げ出さないで下さい。継続は力なり。続けていけば、一寸先は闇ではなく、まばゆい光が差してきます。行き詰まったときは、気分転換に身体を動かしましょう。外の空気を吸いに、散歩に出てはいかがですか。早起きは三文の徳で、朝のラジオ体操もおすすめです。とにかく身体を整えて、腕力と脚力を鍛えておく限り、千載一遇の好機がそっと近づいたとき、ジャンプしてしっかり掴めますからね。」

## 第5章 虎穴に入るか入らぬか —侍ジャパンのワールドカップ・ロシア大会の断章—

山口 政信

### 1、何を騒いでいるのか

日本の第3戦は大詰めを迎えていた。サッカーのワールドカップ・ロシア大会予選リーグH組。0対1でポーランドの後塵を拝している。しかし、攻めようとしな。監督の顔には苦渋の色が漂っていた。

テレビ観戦者としての感情はざわついていた。勝負の綾の怖さと不思議さが身にしみている元競技者の感情は、論理との綱引きを演じている。その基点はフェアプレーと言い換えられる倫理観で、勝ったのは論理に基づく倫理観。感情に流された正義ではなく、ルールに則った正義をもって西野朗監督の戦術が功を奏することを念じていた。しかし、論理的倫理が勝ち切っていたのかと問われれば、強くYESとは答えられなかった。

世間の評価は概ね西野采配に同情的であった。結果として決勝トーナメントに出場するという最低限の目標は達成したからであろう。が、当の西野氏の胸中は、想像を絶するものが渦巻いていたに違いない。そう思うのは、ルールには抵触しないものの、彼の信条や攻撃的なプレースタイルに反した戦術が用いられていたからである。

その翌朝、この件に関して選手やコーチの前で、責任の所在は自分にある、と謝罪したと聞く。選手たちは監督の采配を支持し、決勝トーナメントに向けた侍ジャパンのベクトルは定まった。残念ながらベルギー戦では最後の最後で逆転を許し敗退したが、その死闘はいつまでも語り継がれる歴史を刻んだと言えよう。

ここに見たコミュニケーション環境の善さは、スポーツ種目は多しと言えど、サッカーは特出している。言うまでもなく西野監督の人柄に負うところが大きい。同時に、FIFAの教育システムも見逃してはならないだろう。

後日、ある関係者から、侍ジャパンには足りないものは？と問われ、持久力と歴史、と答えた。少し噛み砕くと、それは身心のスタミナとサッカー文化史となる。さらに進めて統合すると、健か・強かと表される〈したたかさ〉に落ち着く。

望むべきは、この抽象的な言葉を現場にふさわしい術語に変換し、共通感覚と理解を深めて練習や試合に活かすこと。余談ながら、「スポーツ言語学会」を創設した理由の一端がここにある。余談ついでに後談とシャレルことを許されたい。スポーツ界よお前もか、とばかりに噴出するスキャンダルに、「開いた口がふさがらぬ」腹立たしさがある。政治の価値観に組み込まれたスポーツ界は、この現状から足を洗わなくてはならない。スキャンダルのサントラはスキャンと脱ぎ棄て、新しい鼻緒をすげた下駄に履き替えて出直してほしい。

それにしても、直面している事態を読み切っていたかのような人事であった。長谷部誠主将をこの場面まで温存するには、相当の決心があったはず。スポーツは筋書きのないドラマであると言われるが、この選手交代は勘という読み切った決断によって奏功した。体調がよくなくては、読みも勘もこうはいかない。

残すところ10分。この交代劇によって徹底された戦術は、人情という側面からすれば次善の策であろう。が、非情な勝負という見地からは最善策であった。この間、攻め上がるという選択肢があるなかで、主将は監督の意図を承知し、戦術を周知すべく仲間に言葉をかけ、

両手掌で地面を押さえる仕種を続けた。戦術の不徹底が最悪の結果をもたらすことは、〈ドーハの悲劇〉として記憶に新しい。選手たちはこの悲劇を知ってか知らずか戦闘を避けてパス回しに徹した。中途半端な愚行が繰り返されないことを祈るばかりの長い10分であった。

ところで、この回すという漢字は、大道芸に見る〈回す〉より、〈廻す〉方が好ましいのではと感じ、調べてみたが大同小異。回しついでに、もう少し回り道をしてみたい。最近TVで、看板を巧みに回す〈看板回し〉の存在を知った。世界選手権大会が開かれるほどの〈わざ〉であるが、スポーツの古典として君臨してきたサッカーとは趣を異にしている。近頃、趣味と実益を兼ねた斬新な〈わざ〉を繰り出す若者が、新しいスポーツを席卷している。素直に脱帽して時代の変化を思い、自らの加齢を実感することが多くなった。何はともあれ、一見すれば百聞よりも千倍の得心がいく看板回し。とくにご覧あれ。

看板を回し終え、話を元にもどして解説する。すなわち、日本選手は相手にボールを奪われて失点しないことを目的とし、転がしによる左右へのショートパスでボールキープに終了した、となる。「君子危うきに近寄らず」に的を絞って縦パスを封印し、「墓穴を掘る」危機の回避を玉条としたのである。

予選リーグ敗退が決まっているポーランドは、日本に勝っていることでよしとしているのか、攻めてくる気配はない。一流は一流を知る、ということだろうが、もし日本が猪突猛進すればその限りではなく、「飛んで火に入る夏の虫」とばかりにカウンター攻撃を仕掛けてくるに違いない。スタンドではブーイングと戸惑いが混然となって熱気を帯びていたが、ピッチ上では粛々とした時が刻まれていた。

## 2、戦略と戦闘の間で

まさしく急場であった。〈急場凌ぎ〉であったことに違いはない。違いはないが、〈一時凌ぎ〉という間に合わせではない。ましてや侮りや卑しめであろうはずがない。攻め上がらないという戦い方には、自らの血気に抗うという厳しさが付随する。日本の採った戦術は、外的には穏やかに見えても、内的には耐えて乗り越えんとする、自分を凌ぐためのエネルギーが費やされている。

戦いには多様な意味と解釈がある。戦わないという戦略は上策であり、戦略の中の戦略である。しかし、侍ジャパンには予選リーグを突破し、決勝トーナメントを勝ち進むという命題がある。その命題を達成するためにロシアに出向いてきたのであるから、戦わないという選択肢はなく、戦って勝つという戦略が唯一無二の在り方である。その戦略を生かすも殺すも戦術次第であり、臨機応変に対処しなければ「元も子も失う」ことになりかねない。

では、そもそも戦闘を交えないボール回しは戦術だと言えるのか。日本は戦いに勝つという戦略に基づき、下位の概念である戦術を変更した。それがボール回しである。すなわち、戦術の下に位置する戦闘（小競り合い）による失点を回避するという、戦略に則した戦術だったのである。一刻を争う戦局にあって、ボール回しは戦闘を交えずして敗退するという、予選リーグ突破の妙手であり、「損して得取れ」戦術だったのである。

この手は、「攻撃は最大の防御」の功罪を熟知していなければ、打てるものではない。腹を据え、冷徹さを貫かんとする鬼の決断だ。監督の心中は如何ばかりであったか。こう表現するのも、孤独とは何かを味わってきた経験があればこそ。レベルには雲泥の差はあるが、迫りくる何ものかの気配が感じられた瞬間であった。

攻撃一点張りの者は裸の王様を知らない。攻めて駒を取ることにしか眼中にない〈へぼ将

棋)を指しているようなものだ。サッカーで裸の王様になり得るのはゴールキーパーで、その存在をないがしろにした攻撃は早晚破綻する。「へぼ将棋 王より飛車を 可愛がり」にならぬよう、本末転倒を諫めなくてはならない。彼我洞察をもって戦術・戦闘を運用できる戦略的思考力の持ち主こそが、真のリーダーにふさわしい。本来、攻守は一体でなければならないが、感情にほだされた攻守混同はいただけない。

### 3、彼を知る

この戦術にシフトされた背景には、ある情報の存在があった。それは同じ H 組において決勝トーナメント入りを左右する、もう一つの戦況である。これまでの予選リーグにおける日本の戦績は 1 勝 1 分け。初戦ではコロンビアに 2 対 1 で勝って世界を驚かせた。その勢いに乗ってセネガルとは 2 対 2 の引き分けに持ち込んだ。そして、天下分け目のポーランド戦に見る人間模様とは…。

ポーランドとの実践以外に、戦闘を交えずして戦っている目に見えない相手が 2 つある。その 1 つが葛藤である。また脇道に入るが、ことわざを創る習性からか、ふと葛藤と同意の新語を創ってみたいとなった。そして、私欲に克ち自分を責めて活路を見出す闘いとして、克闘、を思いついた。これを以下の文章に挿入してみると、葛藤する監督から放たれた戦術指令を受け、選手たちは克闘を押し進めて所期の目的を達成した、となるが如何であろう。

見えない 2 つ目の相手は、如何ともし難いコロンビアとセネガルの試合結果である。では、この見えない試合における結果の何が重要なのか。予選リーグは各組 4 チームで構成され、異なる場所で 2 試合が同時に行われる。「試合は下駄を履くまで分からない」と言われるが、日本は見えない試合に片方の下駄を預けている。その預けた下駄とは、フェアプレーポイント効果のこと。試合終了の間際にあって、このポイントで上回る日本は、同時開催の 2 試合が現状の点差のままで終われば、決勝トーナメントに滑り込むことができる。言わば日本の戦術は、薄氷の湖におけるボール回し、だったのである。

ところで、薄氷で連想される言葉には何があるのだろうか。そう、藁である。しかし、フェアプレーポイントには、すぎるべき藁には譬え切れないほどの大きな意味がある。そこで、せいぜい淵に沈んで見せれば、藁にも浮かぶ瀬があるだろうと考えた。先生よりはましかも、とツッコミが飛んできたら、ボケを仕掛けた甲斐があるというものだ。

・学生：「先生、ワラにもすぎる思いですから、単位ください (ペコリ)」。

・先生：「ウン？ ワシは藁か (笑い)」。

さて、日本は 2 つの試合で股裂きにならぬよう、先ずは自力で 0 対 1 を守り通さなければならなかった。加えて、もう一方の試合が現状維持にて決着することも欠かせない要素である。この両者が噛み合って一本となったとき、日本はフェアプレーポイント差の恩恵に浴し、念願の決勝トーナメントへと生き残ることができる。

戦闘を避けてボールを回す自力の戦術は、「人事を尽くして天命を待つ」に譬えることができる。が、それは決して「苦しい時の神頼み」という虫のいいものではなかった。この精神は、科学の粋を集める宇宙航空研究開発機構 JAXA にも通じる。通底するのは人事を尽くすこと。誓願の力は人事を尽くした後にこそ降り注ぐものなのだ。

もちろん、「棚ボタ」という戯れ事もなくはない。が、勝負の世界に生きんとする者、組織を率いるリーダーたる者は、可能性を天秤に懸けざるを得ない。「勝負は時の運」とは言いながら、前例に味をしめて「株を守りて兎を待つ」ようでは、身は干からび組織は滅ぶ。

「火を見るよりも明らか」な危険性を回避できずして、リーダーの責務は果たせない。

西野監督には神頼みなどは微塵もなかったであろう。横綱相撲（最近疑問だが）を期待する世間の感情とは裏腹に、目的を達成するためにはルール上の手段は選ぶ、という方針が採られた。なぜなら、世界における日本の立ち位置を痛いほど知るからである。つまり、ボール回しは彼を知り己を知り得たからこそその戦術だったのである。

#### 4、虎穴に入ったのか

サッカーにおいて「伝家の宝刀」といえば、点取り屋すなわちストライカーと相場が決まっている。守りに徹して引き分けたとしても勝ち点は1。この消極策では生き残れない。何としても3点を取るために勝たなくてはならない。次に、勝ち点と同じであれば得点マイナス失点の差が物を言う。これらの点数が決勝トーナメントに勝ち上がるために求められる主たる条件である。最終的な決着は抽選になるが、その前の段階での判定はフェアプレーポイント差による。警告数が少ないチームに与えられるポイントのことだ。

本稿の論点は、このフェアプレーポイントに一縷の望みを託した侍ジャパンの戦い方にある。が、何とも皮肉な光景だ。日本チームはフェアプレーポイントを得るために、アンフェアとも映るフェアプレーに徹している。肩身の狭い思いにつまされながら、いや、そんなことはないと強がっても、皮膚のどこかに緊張が走っていた。ここまで書き進んでくる間にも、フェアではあるがよりフェアでありたい、という潜在意識を消し去ることはできなかった。それでも、その心裏に抗い、フェアプレーポイントにすがってでも勝ってほしかった。負ける悔しさを数知れず味わってきた弱者の悲哀だ。

結果として日本は虎の子を得た。虎穴を選び切って虎子を得た戦術は、ストライカーという宝刀を封印してミッドフィルダーを投入した結果である。世間の常識に抗したこのギリギリの決断をもって、虎穴に入らなかった、と誰が言えよう。

それにしても、救われたのは西野監督に官軍の奢りがなかったことだ。「勝ち上がったけれど、あの決断が決して正解だとは今も思えません」（『アエラ』2018.9.3）というコメントからは、人柄が見え人生哲学が伝わってくるではないか。

人生は選択の連続であるが、それはスポーツゲームとて変わることはない。判断や選択は決断と言い換えてもよい。「清水の舞台から飛び降りる」という戦術は言うまでもなく、「負けるが勝ち」を決断して対処することも、虎穴に入ったことに変わりはない。

かくして侍ジャパンは虎穴に入り、見事に虎子を得たのであった。

#### 5、戦いすんで書き終えて

よくもまあくぐらんと、と内省しきりである。苦であったかと問われれば、楽の種だったと恍けてみたくなるへそ曲がり。すでに恍惚の人になりつつあると自認していたが、お陰でブルースでも歌いたくなるほどに甦った。多少なりとも似非エッセイストを自任できたのは、同人誌のお陰と言う他はない。感謝しきりである。

## 第2部 ことわざコラム

## 第1章 少し愛して、なが〜く愛して

石原 仁誌

学生時代を神戸の東灘区御影で過ごした私は灘の生一本と言われる日本酒をコンパなどではよく飲みました。いや正確に言うと先輩から飲まされました。学生時代前半を過ごした下宿や後半一人暮らしを始めたアパートのそばにも、剣菱、白鶴、菊正宗、百万両などの有名な酒造メーカーがたくさんあり、正月の帰省明けなどは酒粕のいい香りがしていたのを懐かしく思い出します。

当時は今と違ってコンビニなどもなく、下宿やアパートなどで友人と夜、夜中に飲む折は氷なども容易く手に入らず、冷やして飲む酒類は敬遠されていたようでした。ウイスキーなども自販機のコーラで割ってコークハイにして飲んだ記憶がありますが、口当たりが良く飲みすぎるのと、安いウイスキーを飲んでいたので、よく悪酔いしていたのを覚えています。安いウイスキーと言いましたが、当時、角は高嶺の花、リザーブ、オールドは実家に帰省の折に親父のを相伴するのが関の山。もっぱらレッドでホワイトも部屋にあるのは珍しかった記憶がします。

社会人になると仕事でもプライベートでも洋酒を飲む機会はぐんと増えましたが、一つにはサントリーのCMの影響も大きかったように思います。私は受験しませんでした、関西の優良企業であったサントリーには私の同級生が何名か就職しました。

大原麗子によるこのTVCMが流れた時も、既に大原麗子は我々世代には憧れの女優でしたしなによりもあの舌足らずな甘い語り口に、参ったご同輩も多かったのではないのでしょうか。この「少し愛して、なが〜く愛して」というキャッチコピーも「さすがサントリー、流行のコピーライターを使ってうまく広告宣伝したな」くらいに当時は思っていました、印象としては強烈でその映像イメージは今でも脳裏に焼き付いております。

そんな私が10年前に当会に入会して、覚えたことの一つに「創作ことわざ」がありました。「赤信号、みんなでわたれば怖くない」を時田会長から「創作ことわざ」だと教えてもらった時にはとても驚いたものですが、その後自分なりにあのキャッチコピーは「創作ことわざ」だったのだと一人悦に入っておりました。

さあ、それからどれくらい経った頃でしょうか、これも何かの折に時田会長とこのサントリーCMの話をして、改めてこれは英語のことわざ *Love me little, love me long* が元になっていると教えられ、再び驚いたことを覚えています。目から鱗が落ちるですね。

当時、サントリーがどのような戦略のもと宣伝会議を開き、どのような経緯であのCMが出来たかは知る由もありませんし、知ろうとも思いませんが、なまじことわざをかじった私のような者も、「創作ことわざ」や「英語のことわざ」ということをご存知ない方にも、私同様やはり長く印象に残ったTVCM、いやことわざになっているのではないのでしょうか。

大原麗子さんも若くして亡くなられて既に久しいですが、このことわざをテーマにしたおかげで、酒の味を覚えたころの学生時代、モーレツ社員を標榜して酒にだんだん強くなっていった若き頃のサラリーマン時代を懐かしく思い出しました。ちなみに数々の失敗を繰り返して、今ではいい酒をたしなむに至った私であります。

(注)文中のことわざは斜字にしました。

## 第2章 心に残ることわざ

熊本 惠丹

私は台湾生まれの台湾人です。14才の時に日本に移住し、帰化しました。初めてことわざに接したのは幼少期に読んだ台湾の絵本でした。そこに見た「愚公移山、孟母三遷、臥薪嘗胆、呉越同舟…」は、ストーリーや挿絵とともに鮮明に蘇ってきます。絵本を通して面白さを知ることができたからこそ、これらのことわざは半世紀を経た今でも頭の片隅に残っているのだと思います。

他方、日本で過ごした中学時代から今日に至るまでに耳にした慣用句やことわざも、頭から離れることはありません。日本では「手塩にかける、眉唾、手前味噌、虫がいい…」など、いわゆる中国から来た四字熟語以外で、慣用的に使われていながらも知らなかった言葉にも数多く出くわしました。しかし、その度に聞くのも恥ずかしく、文章や会話の内容を推し量りながら全体の意味を解釈してやり過ごしてきました。

そして後、幼児教室に通っていた息子が慣用句などを学ぶ機会があり、そのとき初めて、日本では小学校で慣用句やことわざを学ぶんだ、ということを知りました。それは、留学生や私のように中学生として日本に来た者は、日本固有の言葉遣いを知らずに社会の一員になってしまうこともあるんだ、という一種の感慨でもありました。そんな現状を知ってか知らずか、世間では日常茶飯のこととして慣用句やことわざが飛び交っているのです。

このように、台湾には見られない日本生まれの慣用的な句の由来を知り、日本文化に浸っている間に、実に面白いことに気付きました。それはたとえば、以下のような句とその事由です。

- ・「眉唾」は、眉に唾をつければ狸や狐に化かされない、という俗信から生まれた。
- ・「油を売る」は、江戸時代に髪につける油を売り歩いた商人が、売り込むために時間をかけて話し込んだことに由来する。
- ・「虫がいい」は、人間の体内に虫が棲み意識や感情に様々な影響を与える、という古来の考えから生じた。

実際、日本の大学を卒業した台湾生まれの主人は、この「虫がいい」という言葉の意味を知りませんでした。このようなこともあって、調べ始めると予想外のことが分かってきました。ここでいう「虫」とは、人間が生まれた時から体内にいとされてきた三種類の虫のことです。この虫は人が眠っている間に体内から抜け出し、その人の罪悪を天帝に知らせるという「道教」の三尸（三虫）に由来するそうです。「腹の虫が収まらない」「虫酸が走る」もこれに類する句として存在します。

台湾では仏教、道教の信仰が厚く、子どものときから寺院への出入りも盛んです。事実、主人もその道教の教えをよく学んだそうで、常日頃からその教えを口にしていました。それなのに、道教から生まれた虫にまつわることわざが台湾や中国には残存せず、伝来地の日本でも使われ続けていることは驚きでした。

このような新しい発見によって語源や由来を探る楽しさが倍加し、心に残ることわざが一つまたひとつと増えてきました。私は今、なるほどと頷ける言葉の芋づるに導かれながら、文化としての日本の慣用句やことわざを用いて人と話し、共感できる喜びを噛みしめているのです。

### 第3章 ‘スマホ’ と ‘虫’ と ‘ことわざ’ と

小森 英明

所用から乗った夕刻の地下鉄車内で、驚くべき光景を目にしました。私を含め、ほんの数人を除いた残りの人たちが、何と皆、‘スマホ（スマートフォン）’に向かっているのです。それも、各人各様に思い入れたっぷりの表情を伴ってです。

考えてみれば、退社時以降の地下鉄の車内で、たまりにたまったメールを処理しているのだから、それはいわば当たり前の行為とも申せます。また、「人に迷惑をかけなければ、何をしてもよい」という愚行権の行使とも見なせます。しかしながら、考え方や価値観の古い私などは、その場の雰囲気を見て、とても違和感を覚えてしまいました。

いっそ、無表情ならばいざ知らず、ただの機械に向かって、悲喜こもごもの表情に富むその様は、確かに異様な光景に映りました。底意地の悪い私などは、日本人の増長する‘ナルシズム’に、さらに‘スマホ’が拍車をかけているようにしか思えませんでした。あるいは、戦後の権利意識の肥大化に伴って、それが言わば偽装された形で、目の前の‘スマホ’いじりに興じているのでは、などと屈折した疑いを抱きたくもなります。

我々日本人は、かつては、その言葉遣いも含めて、周囲に対し卓越した気遣いの能力を発揮しました。恐らく、幼少時より培われてきた高い集中力が、その根底にしっかりと在ったのではないかと推測されます。しかし、その高いはずの集中力が、‘スマホ’の出現によって、もの見事に低下したのではないかと私は考えざるを得ません。

こうした‘スマホ’の使用に限らず、現代では一般に、見ず知らずの他者とのコミュニケーションを図る度量も能力も、自ずと低下してしまったのではないのでしょうか？ 試みに、一日中、誰とも口を利かずに、飲み食いをしたり、モノを買ったりすることできるかどうか、実験されると面白いでしょう。確かにそれは可能なのです（多少、相手側の馬鹿丁寧な対応に辟易する面はありますが…）。これを私は、‘無言社会の到来’と呼びたいのです。猟奇的な事件が多発する現在、こうした‘無言’に裏付けられる低コミュニケーション社会の到来は、言ってみれば＜傍若無人＞ぶりが堂々と罷り通る世の中でもあり、どこか先に見た‘スマホ’いじりとも似た側面、通底する部分すら感じられます。

牽強付会を恐れずに敢えて言えば、‘スマホ’こそは、本来、他者と効果的なコミュニケーションを図るための極めて便利なツールであるはずですが、期せずして、この現代日本にコミュニケーションの低下を齎している、憂うべき元凶であると言えそうです。

私は、相手との口の利き方も知らず、‘スマホ’にひたすら興じている若者に対して、「君、何か他に楽しみが無いの？」と思わず尋ねてみたくなりますし、片や文庫本を読みふける学生を見ては、「日本もまだまだ捨てたものではないわい」と嘯きたくなります。

ところで、‘スマホ’を扱っている人の後ろ姿を見ていると、ちょうど‘虫’が葉っぱをただ黙々と蚕食しているように、私には映るのです。「昆虫化する日本人!」、そう、このキャッチフレーズこそは、行きつけの飲み屋で咄嗟に思いついた代物です。かつて、日本人のなりふり構わずの仕事中毒を評して、欧米諸国から‘アニマル’と揶揄されましたが、それすら超えて、今や‘虫’と成り果てて、各人各様に‘スマホ’にうち興じているのですから、正に＜蓼食う虫も好き好き＞ということになりましょうか？ （了）

## 第4章 「留学生と牛丼屋」

佐古 恵里香

「風が吹くと桶屋が儲かる」は、私の好きなことわざの1つだ。ある出来事が、ほとんど関係のないことに影響を及ぼして、思いもよらない結果になる。由来を調べると、ネズミが桶をかじるまでになるとは…、なんともばかばかしい話でさらに好きになってしまった。

ある牛丼店で働く留学生がいる。日本に来る前は事務員をしており、日本で初めて接客の仕事をはじめた。彼女が働き始めて1ヶ月ほどたった頃、その牛丼店で不安そうに「ギュウドンナミ」を出している姿をみかけた。日本の接客業は厳しいからなあ…。私は、彼女が心配になった。

そこで、ある牛丼店のエリアマネージャーに相談すると、2～3年前ぐらいから外国人労働者への待遇改善を積極的に行っているようで、彼らが働きやすい環境作りや、一緒に働く日本人の意識改善に取り組んでいるらしい。なので「彼女もすぐに慣れるよ」とおっしゃっていただいた。また、日本で接客業の経験があれば、海外店で即採用してもらえとも言っていた。日本の企業文化を知っている人を雇いたいらしい。日本での経験は、将来役にたつかも知れない。

私は、彼女がすぐに辞めてしまうかと思っていたが、あれから8か月たった現在も楽しく働いているという。研修期間も終わり、給料もいいらしい。誕生日には、従業員だけが知っている裏メニューでお祝いしてもらったそう。また、この8か月間毎日繰り返し言うことで、「牛丼並み」を完璧に発音できるようになっていた。まさに「継続は力なり」を見た瞬間だった。

さて、この留学生によると、雨の日の売上は、晴れている日の2倍以上になるそう。話を聞くと、案外単純だった。晴れている日は、少し高めのランチに行く四条烏丸界隈のサラリーマンが、雨の日は軽いものですませようと入店するらしい。また、同僚の分をたくさんお持ち帰りする人も多いそう。真面目な日本人でも、雨の日は、外に出るのが面倒なんだなあ、そんな人間らしい話が面白かった。「雨が降れば牛丼屋が儲かる」のだ。

## 第5章 一度あることは二度ある—マラソン挑戦記—

清水 泰生

昨年の東京マラソン2017を走ったあと、しばらくしてから、もう少しよいタイムで走れたのではないかと思った。そう思いながら、2017年8月にダメもとで東京マラソン2018を申し込んだ。「一度あることは二度ある」、2008年から2010年まで連続抽選に当たったので今回も…と思ったが、当選倍率が12倍だから当たるわけがないと思った。しかし、何と当たってしまった。またもや「一度あることは二度ある」ということになった。

練習量は昨年と同様だったが練習での設定タイムを下回ることが多かった。年齢と寒さのせいか、速いスピードで押し切るトレーニングが不足している。「余裕があるけどスピード不足かな」と思った。昨年の東京マラソンで足がつかないことが気になっていた。「一度あることは二度ある」と思い、対策を講じなければと思って昨年の大会よりも中間点の通過を2分程度遅く（1時間30分台に）しようと思った。

2018年2月23日夜行バスに乗り、大阪を出発、翌朝東京に着いた。そして、マラソンエキスポのある東京ビックサイトへ。世界六大マラソンになって外国人が多くなったと思う。私は何人かの外国人に声をかけたが、周りの日本人は全く声をかけない。一般日本人ランナーは、英語が大変だと思うが何でも挑戦だと思い声をかけるべきだと思った。ナンバーカードをとって、用事をすませ、夜カプセルホテルへ。そして、明日25日のレースの準備を終えて、21時に床についた。

大会当日、やや寒いがまずまずの天気、スタートする前にある実業団の監督とマネージャーと話をした。「備えあれば患いなし」、足をつるのを防止する薬を飲む。そして9時10分スタート。やはり思った通り体の切れが今一つ。中間点、目標の1時間31分以内をオーバーしてしまった。中間点を過ぎたとき足がつるのを防止する薬を走りながら飲んだ。そして22キロ手前、右足がけいれんしはじめ次に左足が…。あと20キロもあるので一瞬どうしようと思ったが、とりあえずけいれんがおさまるまで歩いて、おさまったら走ろうと思った。その時、記録はあきらめて沿道の観衆はどんな声援をしているか歩きながら観察しようと思った。観察してみると「頑張れ」が多かった。次に「ファイト」であった。中間点1時間30分前後だと歩くランナーがいないので私に対して「大丈夫(か)」「無理するな」の声があった。5キロ弱歩くとけいれんがおさまり、残り16キロほど一定のペースで走れ3時間34分台でゴール。途中歩いたのにこのタイムで走れ驚きであった。

1か月半後ボストンマラソンは、マラソンの前々日NYCで研究発表、翌日ハーバード大学訪問があり、マラソンに専念出来ないなので、今回と同じくらいのタイムかなと思った。

そして、時は過ぎ、ボストンマラソン。激しい雨と風、寒さでその日、終日悪天候であった。足のけいれんがまた起こるかもしれないので「石橋をたたいて渡る」で、3時間50分前後でゆっくり走ることに変更。3時間49分台でゴール。タイムは残念だったが、世界で一番歴史のあるマラソンに走れてよかった。

今シーズンタイムでは思った通りにならなかったが、タイム以外でよい思い出の残るフルマラソン（東京マラソン、ボストンマラソン）であった。

## 第6章 人が人を裁くな by 天之御中主

中尾暢見

2015年に他界した同級生が我が家へ来て光霊となって以降、テレパシー＝量子交信と霊＝肉体を持たない意識体が少しわかるようになった。黒い影霊が光霊につきまとっている。緑内障でないことは眼科で検証した。最初に見えた時には映画『ホーム・アローン』のマコーレー・カルキンのようなビックリ反応を示したが、光霊曰く「相手の魂を見れば霊格がわかり、どちらが上か下か、強いのか、高い霊格かが一瞬でわかる。よくみて。別人や動物に化けていても魂をみれば誰だか分かるだろ。強い方が怖がり逃げる必要はない。悪霊は光る魂には近寄れず何もできない。お前の数メートル以内には入ることすらできないよ。悪霊よりも驚いたお前の顔が怖い、恐怖で魂が震えるから笑顔でいてくれ」という。

テレパシーでは0.1秒にも満たない一瞬の時に多くのメッセージを伝えることができる。メッセージを理解した私は黒い影霊を全速力で追いかけた。生前も死後も光霊につきまとい苦しめようとする黒い影霊を捕まえて説教するためだ。黒い影霊が出る度に追いかけて回したが、逃げ足は速くて捕まえることができない。逃げるのに来る執拗さと、嫉妬と劣等感が漂うサイコパスチックな黒い影霊へ怒り心頭に発していた。

**光霊**は何度も黒い影霊を追いかけてはいけなくと制止するのだが、なぜダメなのか理由を言わないため納得ができずに従わない期間が続いた。霊たちは自己主張をするが、こちらが問いかけたことには精確に返答をしないことが多く科学的な検証と解決は難しい。

しばらくすると光霊の導きで霊格が高い**弁財天**が来て同じく「霊を追いかけて回してはいけなく」とたしなめられたが、ダメな理由は同じく教えてくれなかった。弁財天は時空を超えてあの世で自分たちと罪深き霊たちの未来が各々にどうなるのかを見せてくれた。因果応報の顛末に溜飲が下がった。しかし黒い影霊との鬼ごっこは続いた。

今度は**天之御中主**が来て「**人が人を裁くな、人を裁けるのは天のみだ**」と教えてくれた。それと同時に黒い影霊の正体をみせてくれたのだ。天之御中主は外から眺めるだけではなく、対象者の内側＝一人称の側から対象者の思考と視線が過去世から現世の生涯に亘りわかるため、嘘も言い訳も通用しない。忘れたことも漏れなく記録にある。黒い影霊の正体は人間の生霊で顔がはっきりと見えた。生霊を出す人間とその仲間が光霊を自殺に追い込んだ詳細な経緯もわかった。怪談話よりもおぞましい人間の姿である。

生霊はネガティブな感情から成り魂が体外に出ている間は別悪霊が天こ盛りに憑依して体調悪化するため、さらにQOLが低下して負のスパイラルに陥り不幸な人生を過ごす。ネガティブな敵意に反撃して制裁を加えれば、被害者が加害者へと転化して同じネガティブな負のスパイラルに陥ってしまう。その時が不幸にされてしまう時なのである。情けは人のためならず精神だ。天之御中主のテレパシーを閃いた後は追いかけるのを止めた。

天之御中主の教えは、この世で理不尽な悪いことをされても赦せ、裁くな、切り離せ、戦争をするなということであり、死後の裁きは必ず受けるということだ。現世では、どれだけ清く正しく美しく笑顔で幸せな経験を積み重ねたのかに意義がある。

「人が人を裁くな」という内容は天之御中主と関係が深いイエス・キリストも説いたと聖書に記載がある。天は過去も現在も未来も言わない本心に至るまで全てお見通しである。

## 第7章 家族の干支

中村 富美

私の家族の干支は、父（故人）、母（故人）、長兄、次兄、私の順に、巳（み、蛇）、申（さる、猿）、巳、戌（いぬ、犬）、寅（とら、虎）となる。私は幼少期から、干支から連想されることわざをととても自然に使い、楽しく生活をしている。

母は器用な人だった。が、たまには失敗することがあった。すると母は、「<猿も木から落ちる>からね」と笑って話した。とくに、年賀状の時期になると干支を使って会話が弾んだ。家族の干支の中で、「一番足の速いのは誰か?」「一番強いのは誰か?」「共通点があるのは誰と誰か?」などを考えると、やはり、足が速かったり、強いのは虎かなど話が出たり、家族の干支では私が一等賞を取った。共通点を考えると、猿、犬、虎は四本足で尻尾があるから似ているねとなった。でも、かくれんぼが上手で、ある意味、逃げ足が速いのは、蛇だし、大蛇なら大きな動物でも飲み込んでしまうから、一番強いかも知れない。蛇については謎が多い。手足がないのに、なぜ蛇は前に進めるのか、科学的には証明されているが、単純に考えると面白い。

<犬猿の仲>というが、本当は仲良しなのかも知れない。母と次兄は犬猿の仲良しだった。私と母は姉妹のように仲良しの時もあったが、ずっと一緒に居ると喧嘩になることがあった。猿と虎の仲は聞いたことがない。母と私が衝突すると、犬の次兄が仲裁してくれて、まるくおさまった。今考えると、母と私は親子であったが、まるで<夫婦喧嘩は犬も食わない>という感じであった。

<長いものに巻かれろ>とはよく言ったもので、一家の大黒柱であった父は蛇だった。大蛇だったかは不明であるが、父の給料だけで、一家は生活をしていた。一軒家も建てたので、そう考えると、父は大蛇だったかも知れない。一方の母はやりくり上手で、蛇を助けた猿だった。私はいろんな意味で、母を観察した。<蛙の子は蛙>というが、私は母のコピーは出来なかった。母は上手に嘘を言い、<嘘も方便>ということを実感したので、私はうまく話せるようになったのだと思う。母に内緒にしていたことや、父に嘘をついたこともある。人は上手く生きていくためには、ただ生真面目なだけではうまく行かない。これからも<嘘も方便>を臨機応変に生活に取り入れていきたいと考える。

先日、手が空いていなかったとき、次兄に少し手を貸してほしいと言った。すると、次兄は「猫の手は無いけど、犬の手でもいいかな?（笑）」と手伝ってくれた。

<虎穴に入らずんば虎子を得ず>ではないが、私は新しいことへの挑戦に対して、あまり躊躇せずに取り組むタイプである。干支が虎だからという意味はないだろうか? 次兄はとにかく新しいことへの挑戦はしない。例えば、少し前の話である。車のセルフ給油が始まったころ、私は真っ先に挑戦した。セルフ給油をやったことがない次兄から、手にガソリン臭気がつかないかと質問された。次兄が初めてセルフ給油を体験すると決めるとき、やっぱり、やったことがないから不安だと代行を頼まれ、次兄は見ている。安心できることがわかってから、次兄もセルフ給油はできるようになった。

伝承ことわざに限らず、創作ことわざにも挑戦し、さらにユーモアセンスを持ちながら、これからも楽しく生活していきたいと私は考えている。

## 第8章 「犬が西向きゃ」

三木 恒治

今年（平成30年）は戌年です。犬と言えば、冬季五輪女子フィギュアスケートの金メダリストのロシア選手に秋田犬が贈られたというニュースが話題となりました。外国ではどうやら日本犬ブームが到来したとも聞きますが、日本では昨今の猫ブームに圧倒されている感が否めません。

毎日のように目にする野良猫とは逆に、近年では滅多に野良犬を見かけなくなりました。私は岡山の郊外の住宅地で育ちましたが、幼少時の昭和30年代は野良犬が至る所に出没しており、狂犬病の危険も身近な感覚がありました。「犬の遠吠え」も日常の光景でした。遠吠えだけならまだしも、至近距離で吠えたてられた日にはたまったものではありません。野良犬のみならず、玄関先で今にも飛び掛らんばかりに待ち構えている番犬にも肝を冷やしたものでした。「吠える犬は噛まぬ」ということわざなど知る由もなく、下校が遅れた時など暗がりの中を恐れ慄きながら家に帰った記憶が今でも鮮明に残っています。実際に追い掛け回されたことも一度や二度ではありません。闇夜に溶け込んだ猛犬の不気味さは、スリラー映画さながらでした。自身申年ということと関係があるのかどうか、「犬猿の仲」の犬は、子供の頃は苦手な手合いでした。とはいうものの、保健所の係員が野良犬を捕獲する場面に遭遇した時に犬の見せる訴えかけるような切ない表情、悲しげな呻き声は、今思い出しても心が痛みます。私にとって犬は子供心に恐怖と憐憫という相反する感情を呼び起こす存在であり、それが動物をめぐっての原体験となりました。

あれこれ思いつくままに犬ことわざを引用しましたが、個人的に一番なじみ深いのは「犬が西向きゃ尾は東」です。人口に膾炙している「犬も歩けば棒に当たる」よりずっと親近感がありました。物事のごく当たり前の道理を表わすことわざですが、恥ずかしながら私は最近までこの意味を知りませんでした。それでも不思議なもので、七五調のリズム感も幸いしたのか、小学生のころから挨拶代わりに使っては楽しんでいました。西向（にしむき）という名の友人がいたのです。このことわざのおかげで西向君とは親しくなれた気がします。考えてみれば日頃の挨拶にしても、私たちの大半は由来や語源を知らずに使っています。同様にことわざにも意味機能とは別に、合言葉か呪文のような共同体の絆を強めるツールとしての役割があったということでしょうか。ただ、なぜ向くのは西でないといけないのか、またよりによって犬なのかという疑問は子供心にもありました。西が西方浄土のことなら、われわれは日々西に向かってゆっくりと歩を進めていることになります。西を向く犬は、人生の行く末を道標のように指示してくれているのでしょうか。もっとも、昔は犬が西を向けば東を目指して一目散に逃げていたものです。

現代都市の住宅事情は、不器用な犬よりも小回りの利く猫にとって有利な状況にあるようです。地べたを這いずり回ることしかできない犬に比べ、猫は路地の隙間に身を潜めたり、屋根伝いに中空を駆け巡ることができます。明らかに行動半径が立体的で、犬に比べるとはるかに変幻自在で要領が良いのです。今のところ犬がまだ動物ことわざでは幅を利かせていますが、都市化が進む現代社会で犬は実際の表舞台から姿を消しつつあります。ことわざの世界でも猫に主役の座を明け渡す日が、そう遠くはないのでしょうか。

## 【執筆者紹介（五十音順）】

①氏名（担当者）

②出生年 ③出身地 ④所属

①穴田 義孝（第1部 / 第1章）

②1946年 ③東京都出身

④明治大学名誉教授

NPO 法人郷土のことわざネットワーク・ことネット理事長

①蟻川 剛（第1部 / 第2章）

②1950年 ③東京都出身

④公立小学校時間講師、元東京都小学校教諭

①石原 仁誌（第2部 / 第1章）

②1955年 ③岡山県出身

④朝日生命保険相互会社 代理店業管理部 募集管理担当部長  
日本ことわざ文化学会 理事

①熊本 恵丹（第2部 / 第2章）

②1962年 ③台湾台北出身

④旭一株式会社 役員（自営業）

①小森 英明（第2部 / 第3章）

②1962年 ③三重県出身

④武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員

①佐古 恵梨香（第2部 / 第4章）

②1983年 ③愛媛県出身

④京都外国語専門学校 非常勤講師

①清水 泰生（第2部 / 第5章）

②1965年 ③和歌山県出身

④同志社大学日本語日本文化教育センター 嘱託講師  
清風情報工科学院日本語講師養成講座 講師

①時田 昌瑞（第1部 / 第3章）

②1945年 ③千葉県出身

④ことわざ・いろはカルタ研究家

①中村 富美（第2部 / 第6章）

②1962年 ③三重県出身

④三重大学医学部附属病院看護師  
日本笑い学会三重支部事務局長

①中尾 暢見（第2部 / 第7章）  
②1969年 ③東京都出身  
④日本大学非常勤講師  
専門社会調査士

①藤村 美織（第1部 / 第4章）  
②1958年 ③東京都出身  
④フリーランス翻訳（ドイツ語）

①三木 恒治（第2部 / 第8章）  
②1956年 ③岡山県出身  
④岡山理科大学教授  
日本独文学会中国四国支部編集長

①山口 政信（第1部 / 第5章）  
②1945年 ③兵庫県出身（出生地：徳島県）  
④明治大学名誉教授

## 編集後記

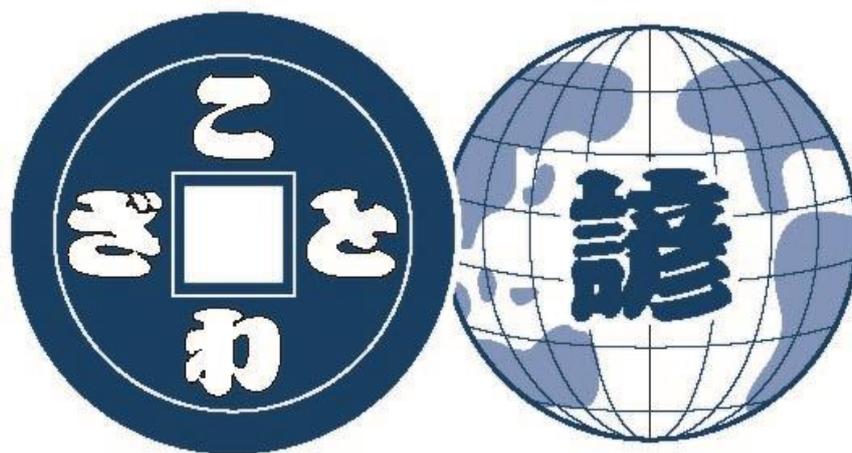
「日本ことわざ文化学会」の事務局は、昨年岡山理科大学に移りました。しかし今年の初夏、岡山は未曾有の豪雨に見舞われました。「晴れの国」岡山は災害とは無縁のはずだったのですが、今回は文字通り「青天の霹靂」の出来事でした。折からの猛暑も手伝い復旧作業は滞り、一部の地域では未だに交通網が回復していません。私どもの大学でも教職員が被災学生への対応に追われる慌ただしい毎日が続き、私自身精も魂も尽き果てた状態でしたが、ボランティア活動に出かける学生たちの溼漑とした姿に背中を押された格好で、厳しい夏をようやく乗りきることができました。同人誌第 2 号は、そうした特別な状況での編集作業となりました。

今号はエッセイ 5 編、コラム 8 編を掲載しております。ご多忙にもかかわらず執筆にご協力いただいた会員の方々に感謝いたします。また、本誌の発刊に当たりましては理事の皆様方のサポートを頂き、誠にありがとうございました。特に小森氏、中村氏、石原氏には、貴重な時間を割いていただき、投稿規定の練り直しをはじめ編集業務に多大なご尽力を賜りました。お三方の協力がなければ発刊にこぎつけることはできなかった次第です。この場を借りて心より御礼申し上げます。投稿数は残念ながら昨年に比べ減少しましたが、次回は皆様方ふるって応募くださいますようお願いいたします。

2018年9月

三木 恒治

# 日本ことわざ文化学会



ホームページ <https://www.kotowaza-bunka.org/>

『コトワザあらかると』

---

2018年11月1日 第2号第2版（改訂版）第1刷発行

発行者:日本ことわざ文化学会©

「日本ことわざ文化学会」事務局

所在地:〒700-0005 岡山市北区理大町 1-1

岡山理科大学教養教育センター 三木研究室

学会 HP : <https://www.kotowaza-bunka.org/>

E-mail : [paremio@gmail.com](mailto:paremio@gmail.com)

FAX 番号 : 03-5840-7976

---